ポーリッシュポタリーショップ

松山 莞太

冬にしては珍しい、雨が滴る夜にミュンヘンクリスマス市を訪れた。その一角に、アグニェシュカ・ポヒワさんが運営する、ひときわ風情のある落ち着いた雰囲気のポーランド陶器のお店があった。

多くの人を立ち止まらせるその陶器たちは少々黄みがかっており、花や水玉といったカラフルな模様を浮かべている。形は大小様々あり、お茶碗からマグカップ、お皿まで多種多様である。ポヒワさん曰く、日本食から洋食まで幅広いジャンルの料理に合うという。確かに、カラフルでありつつ落ち着いたお皿は、ゆったりと過ごしたい食事の時間にならどんな料理もマッチしそうで、お寿司やスクランブルエッグなどを乗せても合いそうだ。

この陶器の起源は中世にまで遡る。ポーランド南部の町で取れた砂を粘土にし、様々な色のついた模様をスタンプにして表面に配置して焼き上げる。この伝統の陶器は昔から受け継がれており、何度か波を繰り返しながら今ポーランドでは再びブームになっているという。ポヒワさんの実家でも使われていたそうだ。

この陶器は丈夫で、オーブン・電子レンジ・食洗機・冷凍庫ともに大丈夫で、実用にも十分耐える作りとなっている。そしてお店では、模様や形の質が良いもののみを取り扱っているそうだ。これから寒くなる季節、このポーランド陶器で家庭の食卓に一縷の温かみを添えてみるのはいかがだろうか。

（まつやま・かんた 2018.12.4）

ポーランド&ニッポン歳時記 28

猫

我が家の近所に野良猫が何匹か棲んでいます。住民たちが餌をやって養っていますが、最近彼らに小屋まで建ててやりました。これでもう猫たちも厳しい寒さから身を守れることでしょう。

na wielkiej klapie　ごみ箱の
śmietnika w środku zimy　蓋に鎮座す
kot jeszcze większy　冬の猫
Monika Tsuda, Poznań　ポズナン市、津田モニカ

krople na szybie　窓たたく
deszcz do taktu przygrywa　雨に合わせて
skrzypiec głosowi　バイオリン
Piotr Wrzeciono, Warszawa　ワルシャワ市、ピョトル・ヴジェチョノ

うらめしや子持ち鰰くち開けて
若僧の歳末勤行いきいきと
熊笹の風除ビュウビュウ鳴りどおし
岩見沢市、霜田千代麿

平取町立二風谷アイヌ文化博物館で今秋

第25回特別展「ブロニスワフ・ピウスツキのみた平取」（仮称）を開催

近代のアイヌ文化研究をリードした人類学者のひとりであるブロニスワフ・ピウスツキ(1866-1918)は、1903 年の北海道調査などで沙流アイヌと交流し、多くの学術資料を後世に残しました。

本展では、明治後半代を中心とした氏の調査概要や時代背景・地域住民との出会い・収集資料(音声、写真、民具等)の紹介を通して、一連の研究の今日的意義を考えます。また、B.ピウスツキを介して近年活発に行われるようになった二風谷アイヌ文化博物館とポーランド各地の博物館との交流の成果を広く一般に紹介します。

開催日時は 2019 年 10 月 1 日（火）～12 月 1 日（日）、場所は当館内の特別展会場です。

2019年は日本・ポーランド国交樹立100年の記念の年ですので、当展示でもできる限り、日本語とポーランド語を併記するよう計画しています。

北海道在住のポーランドの方々及び関係者にもぜひご覧いただきたいと思いますので、今後とも当館事業にお力添えをよろしくお願いいたします。

（平取町立二風谷アイヌ文化博物館学芸員 長田佳宏）

ポーリッシュ・ポタリーショップ 2016

クリスマス市で賑わうテレビ塔の真下、札幌で写真家として活躍されているアグニェシュカ・ポヒワ（アガ）さんが出店されている、ボレスワヴィエツ陶器の並ぶポーリッシュ・ポタリーショップにはたくさんの人が足を留めていた。日本の食器には考えられないほど、なぜこんなにもカラフルなのでしょうかと尋ねると、アガさんは「遊び心です」と一言。

ではあまり実用的ではないのかと思うと、電子レンジ、オーブン、冷凍なんでも OK と、いろいろ説明を聞くうちにイマジネーションが膨らんで、私もビールジョッキは止めにして、かわいい蓋つきのバターケースを購入、お惣菜などを入れてチンして今晩からお酒の時間の楽しみが増えました。

いつもは素通りの冬の大通り公園…澄み切った空気感と眩しいイルミネーション…私たちはなんと美しい街に住んでいるのだろう…そしてポーリッシュ・ポタリーショップ…白一色の札幌の街に求められる艶やかさがここにはある。　（写真と文 松山敏）

誓います/ Przysięgam～日本とポーランドの結婚式について（4）

アグニェシュカ・ポヒワ Agnieszka Pochyła

皆さま、あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願いします。ウエディングシリーズの続きです。今回は衣装についてお話ししたいと思います。

ポーランドでは、基本的には新郎はスーツ、新婦はドレスを着ます。スーツは黒系でシンプルな物で燕尾服はめったに見かけません。新郎の仕事が警察官、軍人、消防士などなら、制服を当日の晴れ着として着ることがあります。フォークロアが盛んな地域では、民族衣装を着る新郎新婦もいます。

ウェディングドレスは白で、近年はすらっとシンプルかつエレガントな物が主流。長さは自由ですが、やはり長いドレスが多いようです。ただ、ダンスもできるように引きずらないスカート丈がポイント。ヴェールはあっても髪飾り扱いのようなもので、顔を隠す（ヴェールダウン）ためではありません。

ポーランドの結婚パーティーは長いと夜中、たまに朝まで続くことが多いですが、お色直しという定番イベントはありません。最初から最後まで同じ服で過ごす花嫁もいれば、日付が変われば好きなタイミングでパーティードレスに着替える花嫁もいます。ただ、日本のカラードレスのようなものではなく、踊りやすい、短めの（膝丈が多い）シンプルなドレスを着ます。新郎のお色直しは暑くなったらジャケットを脱ぐぐらいですね（笑）。

昔はドレスもスーツも買って、数年間ワードローブの中で眠ったドレスを売るか捨てるかが当たり前でしたが、近年は、ドレスはレンタルサロンで借りることが多くなってきました。ネット販売で中古の物を買うという選択肢もありますが、その場合は必ず実物を見て試着するのが常識です。新郎のスーツは未だに自分の物を買うのがほとんど。様々なイベントに使いまわしできるからです。

日本の場合、ドレスがどんどん主流になってきましたが、和装という選択肢もあります。ここで同じ日に様々なスタイルを組み合わせることを可能にするのが、お色直しの役目。和装からドレス、または白いドレスからカラードレスに着替え、自分もゲストも楽しませる演出です。ポーランドではめったに見かけませんが、日本ではふわふわの、お姫様ドレスが人気です。特にお色直し用のカラードレスはディズニーのプリンセスを思わせるような豪華な物が多いですね。ただ自由に動くことが非常に難しく介添えのお手伝いが必須になります。

日本では花嫁だけではなく新郎の衣装にも力を入れています。燕尾服が主流で、色は黒以外もよく見られます。白色・灰色から派手な柄の入ったお色直し用の面白いものまで選択肢はポーランドの花婿より豊富です。

結婚衣装はホテルに入っている衣装サロン、またはそれぞれの会場を担当する衣装屋からレンタルできます。新郎新婦の衣装はもちろん、和服なら二人の両親の服装まで借りることがあります。靴や小物もすべて同じお店でセットとしてレンタルできるので効率的ですね。もちろん衣装プランもそれな

発　行
北海道ポーランド文化協会
〒060-0018
札幌市中央区北 18 条
西 15 丁目 3-19 安藤方
電話・FAX 011-556-8834
hokkaidopolandca@gmail.com
http://hokkaido-poland.com/

POLE

第 87 号 2016.1.15
北海道ポーランド文化協会 会誌

北海道ポーランド文化協会
東京事務所
〒107-0052
東京都港区赤坂 9-6-29-309
音響計画株式会社 霜田気付
電話 03-6804-1058
FAX 03-6804-6058

SAPPORO SNOW FESTIVAL
さっぽろ雪まつり

第43回 国際雪像コンクール

ポーランドのチームが挑戦

2 月 4 日（木）～ 8 日（月）、大通西 11 丁目国際広場
（4 日開会式、4～7 日雪像制作、8 日審査会・表彰式）

2年前にも参加したシュクラルスカ・ポレンバ(Szklarska Poręba)市からの女性2人・男性1人のチームが再挑戦します（主催[派遣]：駐日ポーランド共和国大使館・共催[応援]：本協会）。
ポーランドチームの雪像作りを訪問し、一緒に写真を写すなど、国際交流を楽しんでみませんか。

〈ポーランドチームからのメッセージ〉

私たち「ヤロミリ」チームは 2002 年、故郷の町シュクラルスカ・ポレンバ市の第1回雪像コンクールのときに結成され、それ以来毎年コンクールに参加し腕を上げてきました。

そして2年前、思いがけず日本からご招待を受け、ポーランド代表として誇りをもって第 41 回国際雪像コンクールに参加しました（写真右、ポーレ第 81 号参照）。

3人の女性が3メートル立方の超カタイ雪の塊から雪像を彫り上げることに、みなさんビックリしていました。私たちのようにまったく女性だけの雪像チームは初めてだったそうで、観光客、他の雪像制作チーム、札幌市民のみなさんから、どれほど注目され、暖かい応援をいただいたことでしょう。

私たちは千回も「カワイイ」と言っていただきました。はじめのうちは「ハワイ」と呼ばれたのだと思って、私たちはハワイではなく、ポーランドから来ましたと丁寧に説明していました。

今年またお招きいただいたのはビッグニュースです。札幌でまたお会いしましょう。

チームメンバーは前回も参加したマリア・ミシュタル(Maria Misztal)、ユスティナ・グラフ(Justyna Graf)、そして地元の彫刻家で初参加のグジェゴシュ・パヴウォフスキ(Grzegorz Pawłowski)です。

頑張ります。（ヤロミリ）

14tn
ミュンヘン・
クリスマス市
in Sapporo

報告

ポーリッシュ・ポタリーの出店

昨年もミュンヘン・クリスマス市が 2015 年 11 月 27 日～12 月 24 日に札幌の大通公園2丁目会場で開催されました。例年にない暖冬のせいか、会期中に国内外から130 万超もの人々が訪れたそうです。一昨年につづき出店したボレスワヴィエツ陶器も、素朴な感じが受けて大変な人気です。足を止めた人に聞くと、やはりポーランドの文化を感じるこの陶器に関心があったといいます。

店長のアグニェシュカ・ポヒワさんは「多くの人々が立ち寄ってくれてうれしかった」と話していました。この陶器のキャッチコピーは「ポーランドからやって来たかわいい陶器たち。一つ一つ手作りの温かみのあるフォルム。クリスマスギフトにも最適」とあります。みなさんはどの陶器が気に入りましたか。（文・写真：尾形芳秀）

ミュンヘン・クリスマス市に初出店

～ポーリッシュ・ポタリーショップ～

接客に忙しい店長のアグニェシュカさん

毎年恒例となっている札幌大通公園の風物詩「ミュンヘン・クリスマス市」にポーランドの陶器店が出店しました。第13回ミュンヘン・クリスマス市 in Sapporo (2014.11.28―12.24)は、出店国が日・独のほかリトアニア、フィンランド、ロシア、ポーランド、ベルギーも加わり過去最多、来場者は 100 万人を超えたといいます。

ポーランドからは初めての出店で、ボレスワヴィエツ製のハンドメイド陶器がたくさん陳列されました。「ボレスワヴィエツ」とは、ポーランドの南西部にある都市の名前で、陶器の街として16世紀頃から広く知られています。この陶器は「ポーリッシュ・ポタリー」と呼ばれ、ヨーロッパでも古くから親しまれ高い人気を誇っています。陶器そのものはブルーを基調とした素朴な感じのものが目につきました。

ポーランド陶器を専門に扱う東京の S&A 社がこの出店を企画し，みなさんご存じのアグニェシュカ・ポヒワさんがお店の運営を任されたのでした。

ポヒワさんは「毎日多くのお客さまが来店し、リピーターも多く今後も続けてみたい」と抱負を語っていました。今回は日常使う陶器が多かったのですが、次回はポーランドのクリスマス用品の出品も期待したいと思います。

（文・写真：尾形芳秀　おがた・よしひで）

ボレスワヴィエツ陶器

ポーランド西部の街ボレスワヴィエツ。この街には良質な陶磁器向けの土壌があり、ここで作られるハンドメイド陶器は「ボレスワヴィエツ陶器」と呼ばれ、欧米では有名なものです。

この街では16世紀前半にルネッサンススタイルで陶器作りが始まり、バロック調の時代には図柄を釉薬の下に施す技術を開発しました。素焼きの陶器を回転台に載せて回しながらスタンプし絵付けを行うスタイルがボレスワヴィエツ陶器の特徴です。19世紀初めには15の工房があり、同世紀半ばには中央ヨーロッパの陶磁器生産の中心地となりました。その頃から新しい図柄デザインも始まり、1844 年にボレスワヴィエツ陶器はロンドンの展示会で金賞を獲得し、名実ともにヨーロッパ陶器のなかでも重要な存在になりました。

図柄やデザインは常に増え続け、今では2千種以上にのぼり、伝統柄に加えて今後も進化を続けていきます。元ローマ教皇ヨハネ・パウロ2世もお気に入りだったボレスワヴィエツ陶器。フランス皇帝ナポレオンも5度訪れた街ボレスワヴィエツ。歴史の中で生きて来たハンドメイドの逸品です。

近年日本でも「和食にも使える洋食器」という評判でコレクターやファンが急増しています。丈夫なボレスワヴィエツ陶器は電子レンジ、食器洗い機、オーブンでも使えますので、普段使い、おもてなし用、またインテリアとしても多様にお使いいただけます。（アグニェシュカ・ポヒワ）